

エッセイ集『元号の還暦^{さんとう}三燈随筆(一)』と『仙薬と鯨 三燈随筆(二)』

本通信No. 91で『曼陀羅の山 七福神の散歩道』を紹介しました。『曼陀羅の山』は3部から成り立っていて、その第二部は「三燈随筆」でしたが、これは、言ってみれば、「三燈随筆(三)」で、その前に「三燈随筆(一)」と「三燈随筆(二)」のあることは、No. 91で書き添えておきました。

本号では、その「三燈隨筆(一)」と「三燈隨筆(二)」を取り上げます。「三燈隨筆」は読売新聞大阪本社版月曜日夕刊に、1989年10月2日～93年4月26日の間、連載されたものです。

『元号の還暦 三燈随筆(一)』 (1992 中央公論社) 初出：1989年10月2日～91年1月7日の60回分

『仙薬と鯨 三燈随筆(二)』 (1992 中央公論社) 初出：1991年1月14日～92年6月22日の60回分 (編集委員 橘雄三)

中公文庫版『元号の還暦 三燈随筆』
(一)『あとがき』より転載
傍線は編集委員の加筆

「読売新聞」大阪本社版月曜日の夕刊に、故藤沢桓夫たけおさんが一九七九年九月からお亡くなりになる直前まで、十年にわたって「人生座談」と題してエッセイを連載されておられた。晩年、寝込まれてからも、口述で弟子夫人が筆記されたときいている。あたたかく、そしてすがすがしい語り口に、私も読者の一人として魅せられ、月曜日の夕刊をたのしみにしていたものだ。つた。

ほかならぬその欄を埋めよという話があり、私はつつしんでお受けすることにした。

戦時中、私はエスペランティストたちのなかにまぎれこんで、石浜純太郎先生のお宅に出入りしていた。当時、藤沢桓夫さんは住吉の石浜邸におられ、そこでなんとかお会いした。「人生座談」にも、当時の思い出話のなかに私の名も登場している。そんなこともあって、藤沢さんのバトンはどうしても受けねばならないと思つた。

「人生座談」は文字どおり座談ふうであり、論じる場ではなかった。その伝統をついで私も世間ばなしふうに書こうとした。関西一円に載るだけなので、東京その他の人の目には

ふれていないはずである。私はそのことをべつに気にしていなかったがひよつとすると、身内に語るといった心の構えが、意識の下にあったかもしれない。

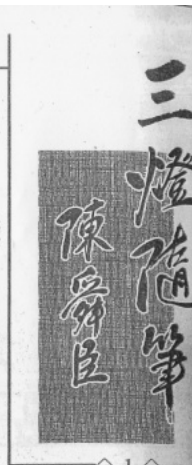
時事に関連したものもあるので、

それぞれ日付をつけた。一九八九年十月二日から一九九一年一月七日までの六十回分をここに収めた。

一九九二年二月十八日

六十八回誕生日 三燈書室にて

陳舜臣



「さういふのは「貞三」でもない、
「半平」でもない、でもない、だ
が、ホテルも普通の至は普通の
が会のため普通の至は普通の
だが「軍の問」といつた難な
とき、「十八番の問」で具を合
わぬのである。

我が家にそれがあつて、
炳、均、河、楊、燈、地

稱へ、行上便利な名称に變つた傾向があり、往の抵抗も多うだ。百変をハルワンに受ける、なかなか確立は薄れる。空氣がすうもいるだろう。なかなくは十五番といった名称でも、それがまじると、語感に抑揚がムードが響くこともなるものだ。

中國文人は、よく書藝といつて、自分の書に個性をつけてゐる。たとえば、清末、日に上りし趙紹昌は、飲茶至大と号し、「飲茶書畫」と「飲茶文藝」といふタイトルの本を出して、

書畫に、なにかを初をつけやうとて、天井を見つゝ、壁光が間を透るに列ながらでいる。書畫がいづかあつて、書畫は長方形になつてゐるのだ。その形である。二幅書畫」
「ふたつの幅がある。ふたつの幅があるのは、三幅書畫だ。」

の連中って、セロイなんぞ、そんなに
よってまじり、「三極関係」とも
なっただけであらう。

なんだから、いさかかんたんに
命名しようが、じつは「極」
の字は、私にとっては浅からぬ
縁があるのだ。

中国の家族では、その名が世に



ちん・しゅんしん

おいて、文字のわけてるところがある。なにか千子の未だに称する人は、おそくは数千十人ものいるだろうが、一旗の名は、

■ 緒・公・昭・熙・繁・祥
令徳

の順につづられる。現在の孔子廟の歴史をたどる（毎週月日に掲載）

作家 一九二四年生、麻生生まれ。大阪外語大卒。推理作協会員。六九年、玉獅子寺で直木賞。一九七三年、選路で第四回読売文学賞受賞。著書「阿片戦争」中。

『元号の還暦 三燈随筆(一)』内容

中公文庫版表紙 橋本閑雪・画



番号	題
1	三燈書室
2	写音の字
3	人名について
4	同姓同名
5	正しい発音
6	いの一番
7	天と地
8	窓の雪
9	風雷

番号	題
10	山を楽しむ
11	霊の宿る山
12	少林寺
13	臘(ろう)の日
14	新年はいつから?
15	一行禅師
16	加上説
17	千支
18	元号の還暦
19	開高健氏との賭け
20	開高健氏との旅
21	雪の日
22	春の字
23	閉校式
24	新学年
25	眼鏡記念日
26	また眼鏡記念日

番号	題
27	横綱の風格
28	ルール
29	クリケットとポロ
30	愛馬
31	タスキ
32	馬の絵
33	国際花
34	愛蓮の説
35	桐の話
36	勤労奉仕
37	方位のこと
38	アラムート
39	未来記
40	ナマズ
41	婦という字
42	重箱と湯桶
43	乾杯と挨拶

番号	題
44	カップと茶碗
45	まぼろし雑記
46	泡とかげろう
47	西アジアのこと
48	虚々実々
49	落選も万歳
50	正倉院におもう
51	五絃琵琶
52	月琴
53	碁の伝来
54	博奕
55	碁敵
56	将棋・象棋
57	酔っ払った象
58	誓文払い
59	カマドの神様
60	松竹梅

「1 三燈書室」に、
名無しの権兵衛の書齋に、なにか名前をつけてやろうと、天井を見上げると、蛍光灯の間を置いて三列ならんでいる。そこでとりあえず「三燈書室」と名づけることにした。この連載エッセイの題も、それによってきまり、「三燈随筆」となったわけである。
という記述があります。
しかし、ただそれだけで「三燈」になったわけではありません。
三燈とは陳舜臣さんの別名でもあるのです。中国の家族では命名すべき名の一字が、あらかじめ決められている

「三燈」とは陳舜臣さんの別名



陳舜臣さんは書も達者です。

題字も陳さん

文庫本のキャッチコピー
正倉院の琵琶の来歴をたどり、中国・ペルシャへと思いを馳せ、故事・ことわざを掘り下げて、歴史と人間を考える。深い学殖を機知とユーモアにつつま、閑達自在に筆をすすめる興味尽きない随想集。

文庫本のキャッチコピー

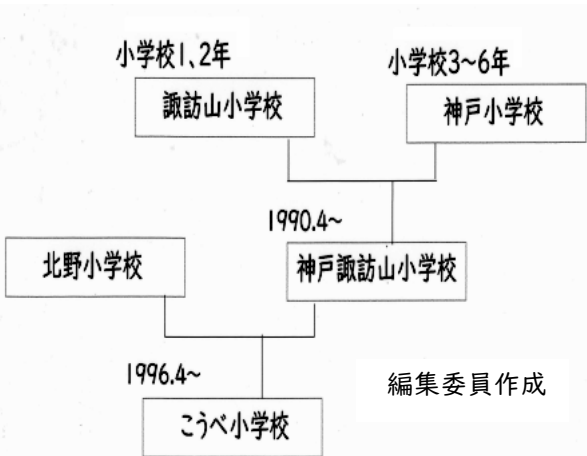
収録作品「18 元号の還暦」が単行本の標題になっています。

「23 閉校式」(一九九〇・三・二六)補足

これは、陳舜臣さんが、母校、神戸小学校から閉校式の案内を貰ったことから始まるエッセイです。合併後の学校の名前は神戸諏訪山小学校でした。

単行本の標題『元号の還暦』は？

ことが多い。陳家ではなぜか炳・培・鈞・河・楊・燈・地・銀・漢となっていた。陳舜臣さんは「燈」の世代で戸籍では三男なので、三燈と名のつたということ。詳しくは「1 三燈書室」をお読み下さい。



『仙薬と鯨 三燈随筆(二)』内容

中公文庫版表紙
紙橋本閑雪・画



番号	題
1	日月の長短
2	チャイナキャンプ
3	金山蝦
4	石油雑感
5	運命
6	聖戦
7	認識票
8	断食
9	アンディジャー

番号	題
10	迫害
11	三蔵法師
12	女房の古着
13	イカナゴ
14	制服の効能
15	風の路
16	イノシシ
17	田園の溶解
18	幻燈
19	『蘭亭序』の行方
20	『富春山居図』の行方
21	文化摩擦
22	太古
23	市が立つ
24	痛い目
25	ゲル
26	ねり歩き

番号	題
27	氷談
28	月下冰人
29	景観回復
30	鳩ポッポ
31	トンボ
32	カワセミ
33	潜埋
34	大砲の門
35	私の禁煙
36	再び禁煙について
37	天父下凡
38	見知らぬまち
39	バブルと辞典
40	バベルの塔
41	文字事件
42	校という字
43	戒名

番号	題
44	労働
45	落魄(らくはく)
46	水を買う話
47	カタカナ地名
48	ロンドン雑感
49	壁画は語る
50	銅像の運命
51	犬と人
52	仏教伝来
53	吉野ヶ里
54	ジグソー・パズル
55	ハブ
56	雨ぞ降る
57	雪を見た王
58	コブラの話
59	青い白鯨
60	仙薬と鯨

文庫本のキャッチコピー

秦の始皇帝は不老長寿の薬を求めて徐福を船出させようとするが、「大鯨魚」が航海を妨げた。徐福伝説をはじめ、月下冰人の意味、戒名とは何かなど、言葉の奥の豊かな人生の知恵を探りあてる、機知とユーモア溢れる随筆集。

単行本の標題『仙薬と鯨』

収録作品「60 仙薬と鯨」が単行本の標題になっています。

この話は、右のキャッチコピーにもありますが、全くのでたらめとは言えません。なにしろ、『史記』にみえるのですから。

主人公の徐福は琅琊の人とされていますが、この地は山東半島の南の付け根です。かつて、私(橋)が滞在した江蘇省連雲港市の北の端、山東省に近いところで、私も行ったことがあります。

左下の写真は徐福村近くのロータリーに立つ徐福像です(橋撮影)。

友人の話では、この像は、いまは徐福村へ引っ越したということです。



「57 雪を見た王」補足



NHK大河ドラマ
「琉球の風」
日本放送出版協会



首里城正殿
ja.wikipedia.org/wiki/首里城より

「57 雪を見た王」は一九九二年六月二日、初出掲載です。一九九二年と言えば、沖縄の施政権返還二〇年の節目の年で、翌年のNHK大河ドラマ『琉球の風』の原作執筆中でした(初出は、『小説現代』の一九九二年二月号〜八月号です)。

『琉球の風』では、復元されたばかりの華麗な首里城正殿が舞台となりましたが、残念なことに、二〇一九年、火災で焼失してしまいました。

『元号の還暦』『仙薬と鯨』補足

『元号の還暦』

「51五絃琵琶」補足

陳舜臣さんは、「51五絃琵琶」で、「正倉院御物のこの一点」といえばこれを選ぶとおっしゃるのが「螺鈿紫檀五絃琵琶」です。「あとにもさきにも、唐の五絃琵琶の現物は、我が正倉院の一面のみである。じつに貴重な一面といわねばならない」ともおっしゃっています。



上の琵琶の撥(バチ)のあたる部分を拡大したのが左の画像です。異国風の人物が、駱駝に乗って琵琶を弾いています。

画像は、五絃琵琶も阮咸も宮内庁ホームページから転載。月琴はネットから



「52月琴」補足

ふつうの琵琶はいわゆる西洋梨形であるが、月琴はその名の通り、満月のようにまんまるの形をしている。江戸期に、中国から長崎に伝えられたという。



正倉院の阮咸は、正円形の部分の約一倍半の長さの竿がついているが、月琴はもっと短い。竿の長さから見れば、やはり阮咸と月琴とは別物であるとすべきであろう。(「52月琴」より)



上の画像は正倉院御物螺鈿紫檀阮咸の背面で、二羽の鸚鵡が旋回している図柄です。正倉院にはもう一面、桑木阮咸があります。

『仙薬と鯨』『19「蘭亭序」の行方』補足

蘭亭は浙江省の紹興にあった。王羲之はここ会稽山の麓で名士を招いて「曲水の宴」を開いた。現在は「蘭亭風景区」になっていて、鷺池、曲水流觴、蘭亭碑、王右軍祠などがある。下及び左の画像は編集委員撮影。



上の画像は蘭亭王右軍祠にある、褚遂良摹「蘭亭序」です。ここには、虞世南臨「蘭亭序」もあります。摹は真筆を敷き写すことで、臨はそばに置いて手本にすることです。

王右軍祠入口→

「20「富春山居図」の行方」補足

『富春山居図』は幅三十三センチ、長さ六・三七メートルの長巻ものですが、「20「富春山居図」の行方」に記述があるとおり、真本と摸本(摸写)の両者が現存し、共に、台北の故宮博物院が所蔵しています。

